

# 中国小学校国語科授業における 「読書へのアニマシオン」の実践

張 琳\*・藤原マリ子

The Application of “Animacion a la Lectura” to the National Language Class in China

ZHANG Lin\*, FUJIWARA Mariko

(Received January 15, 2008)

キーワード：文学教育 読書へのアニマシオン

## はじめに

近年、子どもが本を読まなくなったと言われている。現在の中国においても、同じ問題が存在している。日本の教育機関などでは、「読書へのアニマシオン」という読書指導メソッドが注目を集めている。「読書へのアニマシオン」とはスペインのモンセラット・サルト氏らが開発した「子どもの読む力を引き出すメソッド」である。1974年ヨーロッパ各国の児童文学関係者、専門家の会議場で子どもの読書離れが話題となり、モンセラット・サルト氏らが20年にわたる試行錯誤を経て「読書へのアニマシオン」を開発した。「読書へのアニマシオン」は子どもたちに読書の楽しさを伝え、子どもが生まれながらに持っている読む力を引き出そうと開発・体系化した読書指導メソッドである。読書をゲームとして楽しみながら読解力・表現力・コミュニケーション力を育てるものである。

「読書へのアニマシオン」の75作戦には、例えば次のような例が載っている。

①「間違い探し」

わざと間違えて読み、間違いを発見させるゲーム。

集中して聞き、批判的に読む力の芽を育てる。

②「これ、だれのもの？」

登場人物の持ち物や服を当てるゲーム。

集中して本を読み、話し合って問題解決する力を育てる。

③「前かな？後ろかな？」

予め分割した文章から、元の物語を組み立てさせるゲーム。

物語の構成を論理的に把握し、話し合って課題解決する力を育てる。

この「読書へのアニマシオン」を体験した子どもたちからは「絵本が好きになった。国語が一番好きな学科になった。」という声が聞かれている。そして、何よりもアニマシオン

---

\*山口大学大学院東アジア研究科比較文化コース

のゲームを体験している時の子どもたちの笑顔が、いかにアニメーションが楽しいかを教えてくれる（邦訳：『読書へのアニメーション 75 の作戦』M. M. サルト／柏書房／2001・12）。

2002年5月に日本の文部科学省から配布された「子どもたちに読書の喜びを！学校における読書推進の手引き」に、「読み聞かせ」「ブックトーク」「朝の読書」と並び、「読書へのアニメーション」が紹介されている。

「読書へのアニメーション」では、事前に子どもたちに同じ本を読ませることが条件になっている。しかし、中国ではもちろんのこと、日本の学校の図書室でも、予算内でたくさんの本を置きたいということで、同じ本を20冊か30冊を揃えるということは難しい。また、同じ本が揃っていたとしても、「読書へのアニメーション」を行うときまでに、その対象の子どもたち（学校で行う場合は学級の子どもたち）全員がその本を読むということは期待しにくい。子どもたちも結構忙しいのである。せいぜい、朝の読書の10分間でしか読書をしていない子が多いというのが現状である。そこで、今まで、日本で行われた「読書へのアニメーション」の実践では、読み聞かせを行った後にアニメーションの作戦を行うことが多かった。ページ数が多い本であれば、何日かかけて読み聞かせを行う。読み聞かせは、皆で一緒に行う読書といえる。（読み聞かせ以外の方法であれば、教科書教材を使って行うのがよい。）

現在、中国では、国語科教育改革の一環として、読書指導に力を入れ始めている。そこで、スペインや日本で「読書の技術」を高める方法として用いられている「読書へのアニメーション」の方法を、中国の小学校の国語科授業でも導入する実践を試みた。

## 1. 国語科教育用アニメーションの構想

学校での国語科教育に「読書へのアニメーション」を導入することは、読書離れに対する有効な方策の一つである。「読書へのアニメーション」は、作戦と呼ばれるゲームを通して、系統的に読書好きの子どもを育てていこうとするものである。文学的な文章の読みの授業を行う上で「読書へのアニメーション」を用いることの有効性について、以下に述べる。

### ①「読解と読書をつなぐ」方法として

今までの教室における文学教材の読解授業は、ややもすると、普段の生活の中での読書とは異質な読みになりがちであり、教室での読書が日常生活における読書につながらない傾向があった。

しかし、本来、教室での「読書指導」は生活の中の「読書生活指導」でもあるべきである。両者が乖離しすぎてしまったために、読書をしない子どもが増えてきたという一面が指摘される。その点、「読書へのアニメーション」はスキーマ理論を背景にしており、読解指導を含んだ読書指導の方法として、教室の読書を生活の中の読書につなぐ上で有効に機能する。読書好きな子供たちを育成する効果的な方法といえる。

1) 知識を構成するモジュールとして想定される概念であり、認知過程を手式に基づいて広く用いられる理論的な概念。知覚・言語理解・記憶の想起などの過程におけるトップダウン型処理の進行の説明に中心的役割を果たす。しかし、スキーマの構造やスキーマ同市がどのように関連して構造化され貯蔵されているかはまだ明らかにされていない。

## ②「読みの学習へ興味を引き付ける」方法として

子どもたちが読書に余り関心を示さなくなった原因としては、いくつかのことが考えられる。1 つは、現代情報社会の中の多くのメディア情報の影響、2 点目としては、今まで受けた受身的なパターンの授業の悪影響が挙げられる。「読書へのアニメーション」は、未だに本の面白さに出会ったことのない、情報化社会の中のゲーム世代の子どもたちをターゲットに開発された方法である。子どもたちの熱中する遊びの中にある学びの原理を、読書活動にも応用している点が注目される。「読書へのアニメーション」により、子どもたちは楽しみながら、「読み」への関心を高めていくことができる。

## ③「楽しい＝分かる」方法として

これまでの授業実践においても種々の実践が試行され、パターン化した読みを脱却しようとの試みがなされてきた。しかし、「読みの楽しさ」が必ずしも「読みの理解」につながらない点に問題が指摘された。例えば、作品を読んで劇にしたり、ペープサート（紙芝居）を行ったりするような、読みと表現とを組み合わせた単元を構想した場合、子どもたちの意識はどうしても、絵を描いたり、振り付けをしたりする具体的な活動のほうに集中しがちである。作品自体を深く読解することは副次的な活動になってしまう。体を動かしながら行う活動の楽しさの方に気をとられてしまうのである。

その点、「読書へのアニメーション」を用いた場合、教材のポイントとなる部分、すなわち、その教材で身につけさせたい「読みの技術」を「作戦」として設定することができる。子どもたちが楽しみながら「読みの技術」に気づき、理解することができる授業を構想することが容易である。

また、「読書へのアニメーション」を繰り返すことで、子どもたちは、次はどんなゲームをするかを予想して次の教材を読むようになる。身につけた「読みの技術」を意識することで、より深く本を読むことが可能になるのである。

## ④「精読主義ではない読みの学習の充実」方法として

従来の「詳細な読解」に代表される精読主義を脱するために、また文学的な作品に充てる授業時間数の減少の中で確かな読みの力を育てていくために、「読書へのアニメーション」は有効な方法である。

「読書へのアニメーション」を国語科の授業に導入するという視点に立ち、足立幸子氏は「読書へのアニメーション導入の意義」（『山形大学教育実践研究』第9号・2000年）の中で「教室用アニメーション」を次のように構想している。

レベル 1	読書行為に一般化される「読みの技術」の獲得をねらいとした、教科書教材文を用いての「読書へのアニメーション」
レベル 2	「読書の技術」の獲得をねらいとする中で、①で身につけた「読みの技術」の有用性を自覚した読書体験をめざす、教科書以外の教材（丸ごと1冊を基本とする）を用いての「読書へのアニメーション」
レベル 3	①、②を総括し、さらに本文化への参加の力を身につけることをねらいとした「読書へのアニメーション」

アニメーションのレベルを3段階に分類し、きめ細かな読書指導を構想している。足立氏の構想に従い、本稿では中国の小学校で、足立幸子氏の論文におけるレベル1の実践を行った。3においてその実践結果を報告したい。

## 2. 中国における文学教育の現状

2003年の中国教育部（日本の文科省に相当）から発表された中国の教育改革には色々な課題が含まれている。その中でも国語科教育における文学教育の扱いに関する検討は最重要課題の一つである。

これまで、国語科教育についての論争が起きるたびに、文学教育についての論議も必ず行われてきた。1950年代には、国語教育と文学教育を分けて行おうという改革案が出されている。1980年代には、その案に応じて、全国各地で模擬授業が実施された。今回の教育改革における文学教育の提案も、こうした文学教育改革の動きに応じた、これまでの研究の続きといえる。

今回の教育改革をきっかけに示された『国語課程標準（試用版）』（日本の学習指導要領に相当する）では、課程教育に関する文書の中に初めて文学教育についての規定が盛り込まれた。小・中学校において、独立した文学教育を行うことが本当に必要なのかどうかについてはまだ統一的な見解は出されていないが、文学教材の重要性については、今日では広く認識されるようになっている。

2003年の新しい『国家語文課程標準』（実験用）では、「学生の文学鑑賞力を高める」ことを目標の一つに掲げている。作品鑑賞の量についても具体的な標準を示しており、例えば、義務教育の9年間に400万字の文学作品を読むことが目標として設定されている。また、児童文学を教育課程に導入すべきことについて記されている。

文学教育を効果的に行うためには、文学作品を鑑賞する読書習慣を身につけさせることが重要である。そうした観点から今回、文学教育を活性化させる試みの一つとして、中国の小学生に「読書へのアニメーション」を用いた読書指導の実践を試みた。

## 3. 実践の概要

前述の「教室用アニメーション」のレベル1の内容を、中国北京市百万庄小学校の3年1組で実施した。アニメーションの有効性を比較するために、同小学校の3年2組では、アニメーションを用いない授業を行った。個々の具体的な授業の内容は以下の通りである。

### (1) 「読書へのアニメーション」を用いた実践

#### ・教材名『マーリャンと魔法の筆』

貧しい少年のマーリャンは絵を描くのが大好き。仙人から、描いたものが何でも本物に変わる魔法の筆を授かり、強欲な大官や王様に屈せず、貧しい人々を助けていく。純粋な心で正義を貫くことの大切さを伝えてくれる話（粗筋を論文の末尾に参考資料①として添付）。

#### ・対象 北京市百万庄小学校3学年1組（40名）

（北京市では平均的な小学校である。）

- ・ 実施日 2007年7月
- ・ 授業実施時数 4時間

### 学習指導案（全4時間）

時限	指導の目標	学習活動「アニメーション」
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 相手に分かるように、表現豊かに読むことができる。</li> <li>・ 相手の読みを、注意して聞くことができる。</li> <li>・ 『マーリヤンと魔法の筆』のあらすじを理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>3～4人グループになり、『マーリヤンと魔法の筆』を読む。</u></li> <li>・ 読後の感想を書く。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 出場人物の人物像と関係を「人物描写などから人物像や心情をとらえる技術」を自覚しながら考えることができる。</li> <li>・ グループメンバーズの見解を参考に、出場人物の関係について、自分なりの意見を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マーリヤンとその他の出場人物の関係とについての表現に着目する。</li> <li>・ 5人のグループになり、マーリヤンと人々の生活環境を、<u>グループごとに話し合い、考える。</u>以下の活動はこの5人グループで行う。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ マーリヤンは人々にやったことを確認することで、マーリヤンの性格をとらえ、「出場人物の個性を判断する技術」を自覚する。</li> <li>・ 「魔法の筆」の「魔法」という言葉の意味を考えることで、「イメージ語の効果をとらえる技術」、「象徴の効果をとらえる技術」を自覚する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 場面により、<u>グループで物語の分解作戦を行い、マーリヤンのやったことを討論する。</u></li> <li>・ <u>立場を換えて、マーリヤンの視点で考える。</u></li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3時間目の「イメージ語の効果をとらえる技術」、「象徴の効果をとらえる技術」を自覚しながら、マーリヤンのやることの意義を考えることができる。</li> <li>・ 「人物をとらえる技術」「表現をとらえる技術」を応用し、予想を立てることで、長編を読む意欲を持つことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>グループでマーリヤンになった自分の気持ちを語る。</u></li> <li>・ <u>全体でまだ分からない疑問点を出し合う。</u></li> <li>・ 授業を通しての感想を書く。</li> </ul>

下線部は「アニメーション」の方法を用いた学習活動を示している。グループで話し合っ  
て、グループメンバーズの見解を聞きながら学習活動を行うことは、「アニメーション」の方  
法の特徴の一つである。

#### (2) 「読書へのアニメーション」を用いない実践

- ・ 教材名 『マーリヤンと魔法の筆』
- ・ 対象 北京市百万庄小学校3学年2組（40名）
- ・ 実施日 2007年7月
- ・ 授業実施時数 4時間

## 学習指導案（全4時間）

時限	指導の目標	学習活動（場面による読み取り）
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読みを注意して聞くことができる。</li> <li>・『マーリヤンと魔法の筆』のあらすじを理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師による範読を聞きながら、『マーリヤンと魔法の筆』を読む。</li> <li>・感想を書く。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マーリヤンの小さい頃の生活環境に着目しながら、マーリヤンの心情が分かる表現に注目し、マーリヤンの気持ちを読み取ることができる。</li> <li>・「人物描写などから人物像や心情をとらえる技術」を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マーリヤンとその他の出場人物の関係に着目する。</li> <li>・<u>場面1から、マーリヤンの願望を指摘する。</u></li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・牢屋にいるマーリヤンの心境を読み取ることができる。</li> <li>・人々を助けたマーリヤンの心境を読み取ることができる。</li> <li>・「事件や人物の転換点に着目する技術」「イメージ語の効果をとらえる技術」「象徴の効果をとらえる技術」を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>場面2から、マーリヤンが大官に捕まれたときの心境を指摘する。</u></li> <li>・<u>場面3から、マーリヤンが貧しい人々を助けた時の心境を指摘する。</u></li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マーリヤン精神とマーリヤンのやることに着目し、話し合うことができる。</li> <li>・『マーリヤンと魔法の筆』についてまとめることができる。</li> <li>・ブックトークで、長編『マーリヤンと魔法の筆』の紹介を聞き、長編読書への意欲を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>最後の場面から、マーリヤンの心境を指摘する。</u></li> <li>・『マーリヤンと魔法の筆』の意味についてまとめ、話し合う。</li> <li>・授業の感想を書く</li> </ul>

下線部は「場面による読み取り」の方法を用いて行った学習活動である。物語の内容を場面ごとに分け、1つずつ理解させる方法は、従来の授業で多く見られたパターンである。

両実践ともに2時限目に、登場人物の関係や、「人物描写などから人物像や心情をとらえる」学習を行った。(1)の実践では、1時限目は3～4人のグループで音読をさせ、2時限目以降は5人のグループを作らせて話し合いをさせた。話す・聞く活動を通じて、コミュニケーション能力の向上にも資するところがあった。教室用「読書へのアニメーション」の方法を活用し、グループ対抗の形として話し合いをさせたことで、子どもたちは生き生きとした表情で活発な学習活動を展開した。

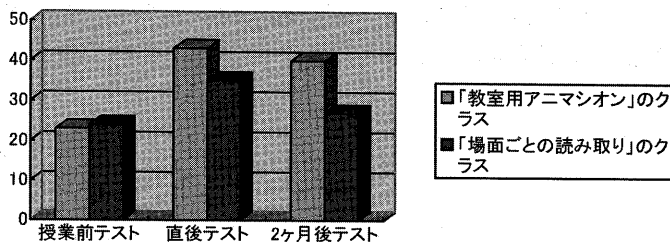
## 4. 実践結果の分析

2つの授業法による「読みの技術」の獲得を、学力テスト（参考資料②）をもとに測定した。学力テストは、今回の目的とした「読みの技術」を使って解答できるように、自作のテストを用い、授業前に1回、授業直後に1回、2ヶ月後に1回の計3回実施した。

テストは現行の国語課程標準の読解標準に基づいて作成したものである。各テストは、2題とし、それぞれに5問程度の設問を付した。テストは、児童の理解力(30点)・総括力(30点)・表現力(40点)の3つの側面から採点を行った。

各テストにおける平均点の推移は、次の表 1 の通りである。

表 1 各テストにおける平均点の推移



授業前テストでは、教室用「読書へのアニメーション」の授業を実施したクラスと「場面ごとの読み取り」を実施したクラスとの間にほとんど差が見られなかった。しかし、授業直後のテスト、2ヶ月後のテストでは、教室用「読書へのアニメーション」を実施したクラスの方が優れた成績を示した。

次に、事前テストの成績を上位群（13人）、中位群（14人）、下位群（13人）に群別し、授業後の直後テスト、2ヶ月後テストの平均と比較した結果が、次の表 2、3、4 である。

表 2 上位群

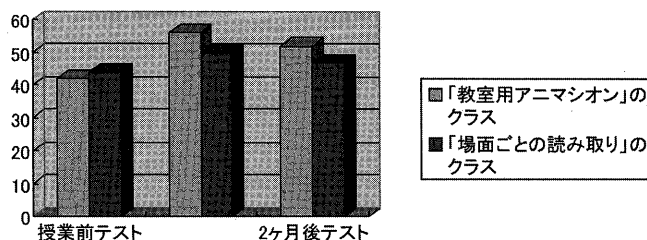


表 3 中位群

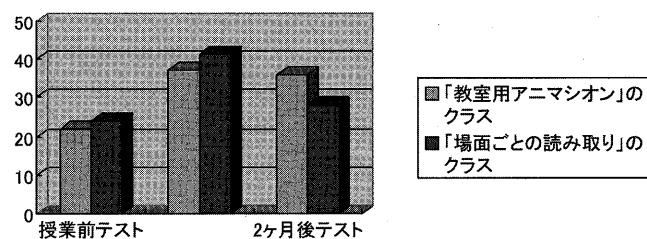
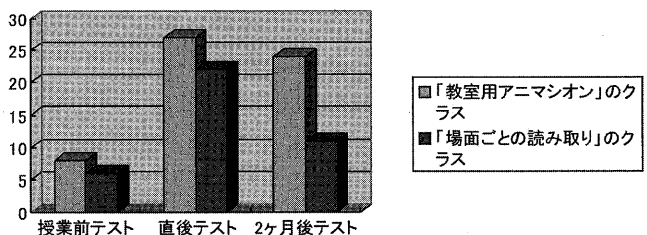


表 4 下位群



成績上位群、中位群、下位群ともに教室用「読書へのアニメーション」を実施したクラスの方が、表3の直後テストを除き、直後テスト・2ヶ月後テストのいずれにおいても、優れた結果を示した。

とりわけ、下位群においては、その差が最も顕著であり、教室用「読書へのアニメーション」の授業方法が、下位群の「読みの技術」の獲得に極めて有効であったことが看取される。

## おわりに

以上のように、教室用「読書へのアニメーション」の授業が、「場面ごとの読み取り」の授業よりも、「読みの技術」の獲得において効果的であるとの結果が得られた。こうした結果になった理由としては次の2つのことが考えられる。

1、「読書へのアニメーション」の作戦を「読みの技術」に焦点化することにより、「確かに学んだ」という実感を伴った授業が展開できたということである。作戦を「読みの技術」に焦点化し、ゲームを楽しみながら学ぶことによる効果が、特に成績下位群において有効に働き、「読みの技術」の獲得につながったといえる。

2、「読書へのアニメーション」による教材の読み返しの回数による効果である。教室用「読書へのアニメーション」による読み返しの回数、精読・味読の効果が「読みの技術」の獲得につながっている。また、コミュニケーション能力も向上しており、この側面からも「読みの技術」の獲得につながったといえよう。

これまで行われてきた授業では、教材は子どもたち全員が同じ時間の中で、同じ回数読むということが当たり前とされてきた。そして、授業外で教材を読み返すという行為はあまり行われなかった。それ故に、読みの能力の低い成績下位群の子どもたちは、いつまで経っても「読みの技術」の獲得が困難な状態のままであった。

しかし、本実践の結果が示しているように、「読書へのアニメーション」の授業の特徴として、授業外での教材の読み返しがあり、これが、成績上位群・中位群・下位群の子どもたちの「読みの技術」の獲得に有効に働く。とりわけ、読みの能力の低い下位群の子どもたちには、読み返しの効果が顕著に見られる。「読みの技術」の獲得が、授業後のテストの成績の上昇という明確な結果となって現れている。

アニメーションを行ったクラスの授業後の感想では、「アニメーションが面白かった」のように「楽しさ」を感想として挙げた児童が10名、「授業より話の内容が深く分かった」のように読みの技術の高まりや内容理解をアニメーションの効果として挙げた児童が24名、「考え方が変わった。マーリヤンの立場に立って物事を考えることができた」のように認識の変容を長所として挙げた児童が6名という結果であった。

また、「多くの人の意見が聞けた」「普通の授業では分からないことが分かった気がする」のように、授業方法そのものをアニメーションの授業の長所として捉えた児童もいた。

以上の結果から、「読書へのアニメーション」を文学的な文章の指導に導入することは、中



国の児童においても有効であると考える。

### 【参考資料①】

『マーリャンと魔法の筆』の粗筋

ある村にマーリャンという子どもがいた。彼は絵を描くのが好きだったが、貧しくて筆を一本も持っていなかった。もちろん学校にも行けなかった。マーリャンは、毎日、木の枝で絵を描いた。日増しにマーリャンの絵は上手になった。でもいくら筆がほしくて、貧しくて買えなかった。

ある晩、仙人がマーリャンのところにやってきて、マーリャンに筆をくれた。マーリャンがこの筆を使って絵を描き始めると、信じられないことが起きた。この筆で描かれた絵はすべて本物になったのである。

それから、マーリャンはこの筆で貧しい人々のために絵を描いた。田んぼで働いている人に、鋤を引く牛を描いてあげたりした。ある大官がマーリャンの筆のことを聞きつけた。大官はマーリャンに銀貨を書くように命令した。しかし、マーリャンはこの要求を断った。そのため、マーリャンは牢屋に入れられてしまった。

マーリャンは魔法の筆を持っていたので、牢屋の壁に扉を書き、大官に捕えられていた貧しい人たちと一緒に逃げた。マーリャンはその後もこの筆を使って、困った人々を助けた。

ある王様が噂でこのことを知った。マーリャンを捕まえて、マーリャンから魔法の筆を奪った。絵描きにお金のなる木を描くように命令した。しかし、絵描きが描いた絵は本物にならなかった。

そこで、王様は仕方なく、マーリャンに絵を描くように頼んだ。マーリャンはまず青い海を描き、その中に金の山を描いた。そして、大きな船を描いた。王様と家来はみんな船に乗った。しかし、船のスピードが遅かったので、王様は「風をふかせろ。」と要求した。マーリャンは風を呼ぶ雲を描いた。すると風があまり強すぎたので、王様は怒った。マーリャンは構わずに、どんどん雲を描いた。結局、船は転覆した。王様と家来たちはみんな沈んでしまった。

その後、マーリャンは貧しい人たちの所に戻り、一緒に働き、絵を描いて、楽しく暮らしたということだ。

### 【参考資料②】

テストは授業前、授業直後、授業2ヶ月後の計3回実施した。各テストはそれぞれ2題とし、問題の文章は子供たちがまだ読んでいない副読本から採った。授業直前テストの[一]の問題を例示する（原文は中国語）。

[一] 「飛ぶ」カエルくん

鳥たちが運動会を開いて、飛び比べをやっていた。

川の向こうにカエルくんがいた。彼はホッペを膨らませて「ふん！偉そうに！僕も飛べるよ！」と言った。そして、高い所に登り、地を強く蹴って飛ぼうとした。しかし、飛べずに、そのまま落ちて地面に衝突し、カエルくんは痛くて、「わ～」と叫んだ。

鳥たちは大笑いをした。

カエルくんは目を怒らせて、「お前たち、なんで笑うの？ほら、僕は着地の瞬間に歌を歌

えただろう！」と言った。

鳥たちは更に笑った。

実際以上に自分をよく見せようとして意地を張ると、皆の前で醜態をさらすことがあるものですね。

問1、中心センテンスに一線を引いてください。10点

問2、鳥たちはなんで笑ったのかな？ 10点

問3、その後、鳥たちはどうして更に笑ったのかな？ 10点

問4、カエルくんは本当に飛ぶことができましたか？ 10点

問5、この話を読んで、あなたはどんな感想を持ちましたか？ 10点